



Title	第2部 WHOへの日本の貢献「WHOが期待する人材」
Author(s)	遠藤, 弘良
Citation	目で見えるWHO. 2011, 45, p. 6-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



第2部 ～WHOへの日本の貢献～ 「WHOが期待する人材」

東京女子医科大学教授（元 WHO 本部熱帯病対策部長） 遠藤 弘良



Hiroyoshi ENDO

昭和30年静岡県生まれ。昭和55年千葉大学医学部卒業後、東京女子医科大学消化器病センター内科において臨床研修。昭和57年に厚生省入省。以後、厚生省・厚生労働省において健康増進栄養課、医事課、国際課、結核感染症課等に勤務、また平成7年から9年まで岡山県保健福祉社に出向。海外ではWHO 西太平洋地域事務局（予防接種対策）、WHO 本部（人材育成、熱帯病対策）、国連エイズ合同計画（UNAIDS）に出向。平成21年7月に厚生労働省を退職し、東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座主任教授に就任。

昨年の今頃（平成21年の9月）新型インフルエンザの記事が新聞紙上に掲載され、その中でWHO もよく登場したため、多くの人々がWHO に関心をもたれました。また小・中学生からも関心があったようで、WHO のことが図1のように新聞に取り上げられていました。

が将来WHO で活躍することを期待したいと思います。

●「WHOの活動について」その1

まず疾病に対する取り組みについて話します。



図1 読売新聞の記事から（2009年5月22日朝刊）

まず「WHOの活動について」と「WHOの組織について」を簡単にお話します。そして、主題であります「WHOへの日本人の貢献について」は、過去にどんな人が活躍し、現在どんな人が活躍しているかをお話することによって、多くの日本人

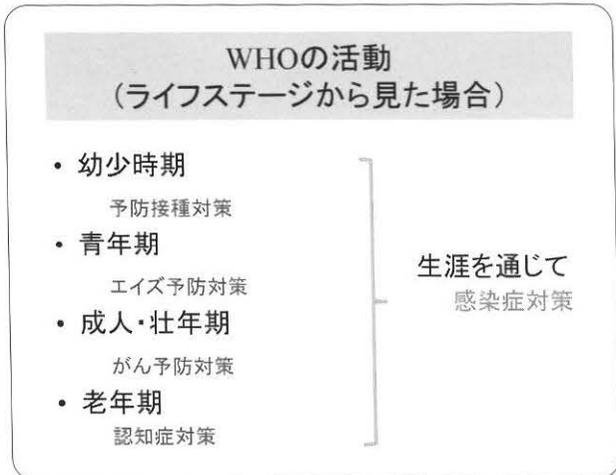


図2 WHOの活動

健康の問題は生まれてから死ぬまで、人類にとって切っても切れないのですが、それぞれのライフステージごとにWHO がどのように関わるかということを図2のようにまとめてみました。

まず、生まれてすぐの幼少期は活動があります。全世界の子供、特に途上国の子供たちに麻疹や破傷風の予防接種をWHO は広める活動をしてきました。

次に、性に目覚めるころの青年期には他にもい

ろいろな健康問題があるのですがエイズ予防を含めた性教育の普及にも努力しています。

そして壮年期には、多くの病気の問題を抱えるのですがその中でも慢性疾患のひとつのがんの予防の活動をしています。WHOは神戸とフランスのリヨンに研究所を持っています。その一つであるリヨンの研究所は、がんの主に疫学的な研究をする施設です。

老年期にはさらに多くの病気があるのですがその中でもメンタルヘルスとしての認知症の対策に力を入れています。

そして人類が生涯通じてかかわる疾病の感染症対策はWHOの最重点の活動のひとつです。新型インフルエンザ対策のことでは皆様も関心を高めたことだと思います。多くの日本人が天然痘やポリオやフィラリア等の感染症の対策に貢献されました。

ノルウェー出身のブルントラント事務局長が手腕をふるわれて、禁煙対策の枠組条約を策定しました。

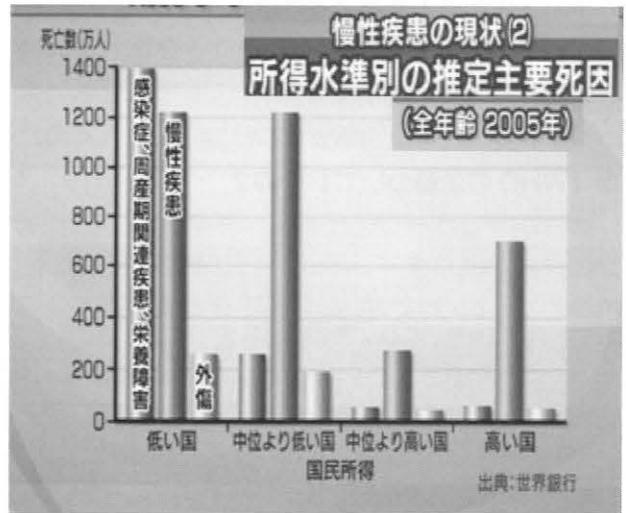


図4 所得水準別推定主要死因

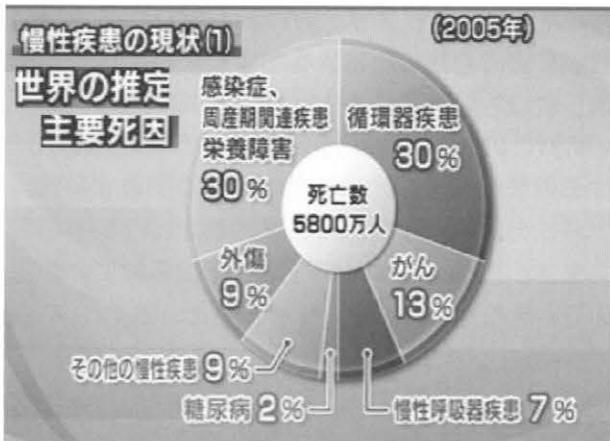


図3 世界の推定主要死因

全世界での1年間の死亡者数は約6000万人と推定されており、図3のグラフはその死亡原因を示しています。その3分の1を慢性疾患が占めています。これは先進国に限ったことではなく、途上国においても同じことなのです。図4のグラフがそれを示しています。感染症と慢性疾患の二つの病気を途上国は背負っているのです。

日本の厚生労働省はメタボ対策に力を入れています。このことは先進国だけの問題ではなく途上国においても重要な問題になりつつあります。日本の経験が途上国にも役立つのです。

慢性疾患対策の一つには禁煙のことがあります。

禁煙対策の一つとしてタバコの価格を上げたり、レストランとかの多くの公共の場所での分煙・全面禁煙が実施されていますが、この推進の背景として枠組条約があります。最近ではなお一層対策が進み、タバコの箱のパッケージは、その多くの面積をタバコの害について、文字だけではなく目で見てわかる絵や写真で示すように指導しています。

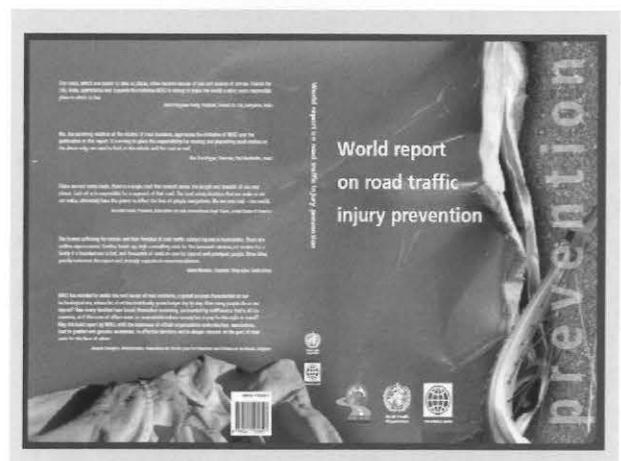


図5 交通事故の世界報告書

WHOでは図5のように交通事故の予防についての報告書を作成しています。先ほどのグラフから死亡原因の数で外傷も多かったことに気づかれたと思います。WHOは外傷や事故の予防にも力

を注いでいます。数年前の世界保健デーのテーマとして「シートベルトをしましょう」を取り上げたこともあります。

このように様々な取り組みをしている WHO は、臨床に対応した医師や看護師だけでなく、様々な分野の人材を求めています。

● 「WHOの活動について」 その2

WHO のもう一つの仕事に、基準やガイドラインの作成があります。その一つが高血圧症の診断基準です。図 6 は WHO 高血圧症ガイドラインですが、血圧計の解説書などでご覧になった方もいると思います。

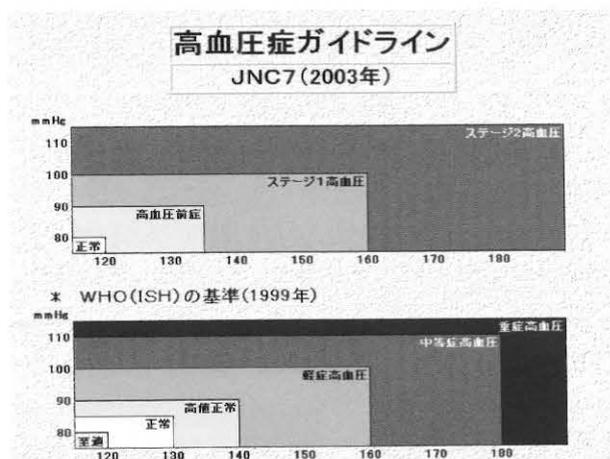


図 6 WHOの高血圧ガイドライン

またワクチンの基準も作成しています。記憶に新しいことは、新型インフルエンザの時も、WHO が先導して新型インフルエンザワクチンの基準を作成しました。また毎年の季節性インフルエンザについても、世界中のエキスパートを本部に招いてインフルエンザのどの亜型が流行するかの予測をたて、それをもとにその年のワクチンの基準を定めるのです。

また、各国で流行している病気を報告し、それを全世界にアナウンスすることが定められている国際保健規約を制定しています。感染症に関係している厚生労働省にとっては大事なものです。

医学部の図書館に行くと電話帳のように厚い ICD という図 7 の右のような図書があります。これは世界共通で病気を分類した本です。世界共通



図 7 ICD-10

の基準で病気を分類し、世界共通で議論ができるのです。図 7 の左のように電子化された CD でも作成しています。電子カルテの時代ではより重要になっています。

日本人にとって関心のある移植の問題について、指針を作成しています。WHO は 2010 年 5 月に渡航移植の自粛の新指針を制定しましたが 7 月に改正された臓器移植法も関係があります。

WHO の仕事は感染症対策だけでなく人間の一生の健康問題にかかわる仕事をしています。せまい意味の医療だけでなく、事故防止の仕事もしています。このように WHO の仕事は多岐にわたるので、それだけ多くの人材を求めています。

● 「WHOの組織について」

次に WHO ではこれらの仕事を、どんな人がどんな組織で仕事をしているかをお話します。



図 8-1 世界保健総会

図8-1のように毎年5月にジュネーブにあるパレナシオンという会議場に世界中の保健担当の大臣が集まり世界保健総会が開催されます。これがWHOの最高意思決定機関です。193カ国の代表が集まりWHOの予算や活動方針など大事な決定を行います。

執行理事会



図8-2 執行理事会

図8-2のように世界の34カ国の代表者によって構成される執行理事会は年に2回開催され、総会では議論できない細かいことを議論しています。この執行理事として前WHO西太平洋地域事務局長だった尾身茂先生も活躍されています。



図9 WHO本部（ジュネーブ）

新型インフルエンザ報道の時に、多くの報道機関がこの建物を背景にしてレポートしていたのでよく見られたことと思いますが、図9がスイスのジュネーブにあるWHOの本部です。WHOの職員は世界全体では6～7,000人いますが、この本部の建物の中で約2,500人が働いています。

技術専門機関なので技術専門家が多くいます。メインは医学ですがそれ以外に看護学や薬学、統計を処理する統計学等の専門家です。また自然科学だけでなく社会科学や人文科学の専門家もいます。規則を作成するための法律家や、活動するにはお金がかかりますので会計の処理をする専門家もおります。この中に30人程度の日本人がいます。



Dr. B. Chisholm
Canada



Dr. M.G. Candau
Brazil



Dr. H. Mahler
Denmark



Dr. H. Nakajima
Japan



Dr. G.H. Brundtland
Norway



Dr. LEE Jong-wook
Republic of Korea



Dr. Margaret Chen
China

図10 歴代のWHO事務局長

図10の7人の方がWHOの歴代の事務局長です。下段の左が日本人の中島宏先生です。その隣は、たばこ問題に力を入れられ、本国のノルウェーの総理大臣をつとめられた医師のブルントラント先



(写真の上が地域名、下が出身国)

図11 WHO地域事務局長

生です。そして次の方は韓国人のリー先生です。そして今活躍されている香港出身の医師マーガレット・チャン先生です。このように WHO では、女性が活躍しています。

WHO は本部のジュネーブですべての国々をカバーするのではなく世界を6つの地域に分け、それぞれに地域事務局が置かれており、それぞれの地域の活動を指導しています。図11の皆さんは選挙で選ばれた地域事務局長です。ここでも2人の女性地域事務局長が活躍しておられます。



図12 WHO 西太平洋地域事務局

日本が所属しているのは西太平洋地域事務局 (Western Pacific Regional Office: WPRO) で、フィリピンのマニラに事務局があります。現在の地域事務局長は韓国出身のシン先生です。先程からお話している尾身茂先生は前任の地域事務局長でした。尾身先生の前の前の方は中島宏先生で2期10年務められた後 WHO 本部の事務局長になりました。



図13 WPROの管轄地域

この事務局が管轄しているのは図13で示した太平洋の島々が含まれる国々や地域です。

図14は日本の神戸にあり、先ほどご講演されたクマレサン先生が所長をされている WHO 健康開発総合研究センター (通称は WHO 神戸センター: The WHO Centre for Health Development) です。



図14 WHO 神戸センター

ここでは「人々の健康は、健康な環境づくりから」をビジョンとして掲げられ、「健康開発分野における、すぐれた革新的な公衆衛生研究活動をはぐくみ、支え、継続していくこと」を使命とし、「都市部における健康格差を是正する」を目標とされています。

● WHO における日本人の貢献

WHO の看板活動である感染症対策においても日本や日本人の活躍には大きなものがあります。

1980年に根絶された天然痘に関しては、熊本出身で医師の蟻田先生のお話をしなければなりません。WHO の最後の天然痘対策部長をされ、天然痘を根絶する WHO の偉業をささえた方です。

中島宏先生は事務局長を2期10年務められ、たばこ問題や、ポリオのエラジケーション (根絶) のプログラムをスタートなさりポリオの根絶に力を注がれました。京都時代の日本 WHO 協会の会合に出席され、ご講演されたと伺っています。

図15は蚊によって媒介されるフィラリアが寄生する象皮症の患者さんの写真です。リンパ腺に

フィラリアが詰まってしまい、このように足がふくれる感染症ですが、この対策には、一盛和世先生が活躍されています。



図 15 一盛和世先生と象皮症患者

図 16 右が尾身先生です。新型インフルエンザの報道やサーズが流行した時にもマスメディアに登場されていましたのでお顔をご存知の方が多いと思います。WPRO の地域事務局長時代に尾身先生も地域におけるポリオの根絶に努力されました。



尾身 茂先生

進藤 奈邦子先生

図 16 尾身先生と進藤奈邦子さん

また、日本のロータリーの皆様もポリオの撲滅には貢献されたのです。この記念のパーティが数年前に京都で開催されました。

図 16 右は現在の WHO の本部のインフルエンザ対策で活躍している進藤奈邦子先生です。新型インフルエンザの報道の時に、日系アメリカ人のケイジ・フクダ先生とともによく登場されていました。NHK の「プロフェッショナル」という番組に出演されたり、彼女がモデルとなったと思われる映画「感染列島」が作られたりしています。

クマレサン所長が話されていたように WHO 神戸センターでインターンを募集しています。WHO の本部でもインターンを採用しており、図 18 はチャン事務局長をインターンの方々が囲んだ写真です。次のアドレスに応募方法が掲載されていますので関心ある方はご覧になってください。
<http://www.who.int/employment/internship/en/>



図 17 WHO のホームページ

少しだけお金の話をしますが、全世界の加盟国は人口や経済的な規模に応じた分担金を支払います。その分担率は図 18 のグラフの通りです。日本は 2 番目に多い分担をしております。

国連機関の職員の採用枠は適正数として国情や人口そして分担金の割合などを考慮して各国ごとに決められています。優劣付けがたい人が応募し



図 18 国連機関の分担金上位国

た場合はその適正数字が下回っている国の人を優先的に採用するシステムがあります。WHOも同様です。本部だけではなく地域事務局も含めた日本の適正数は約120～160です。しかし昨年12月には、本部やマニラ(WPRO)だけでなくアフリカなどで働いている方も含めて40人弱の日本人がWHOで働いているだけです。適正数の約3分の1しかおられないのです。



図 20 「国際保健医療のお仕事」

WHOでは感染症や医学だけではなく幅広い分野で活躍する場があります。若い方だけではなく、シニアで経験を積まれた方もWHOで貢献していただける場がありますので、ぜひ応募していただきたいです。

その応募に関して中村安秀先生が監修されている「国際保健医療のお仕事」という書籍がありますので、参考にされることをお勧めします。

本日、私がお話ししたことにより多くの日本のみなさまが、直接的であれ、間接的であれ、WHOにご協力いただけることを期待しております。

この講演録は、日本医師会・日本商工会議所・大阪府・大阪市・(社)生産技術振興協会の後援、(社)サクラクレパス・サラヤ(社)・ダイキン工業(社)・大日本除虫菊(社)・テルモ(社)の協賛で2010年9月15日、大阪国際会議場で開催した日本WHO協会フォーラム「WHOと日本」で講演していただいたものです。



金鳥は世界で初めて
除虫菊から蚊取線香を発明しました。



KINCHO

www.kincho.co.jp

